

1. 略歴

1989 年 3 月	東京大学文学部国語学専修課程卒業
1991 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程修了
1993 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程中退
1993 年 4 月	明海大学外国語学部日本語学科専任講師（～1996 年 3 月）
1996 年 4 月	茨城大学人文学部人文学科専任講師（～1997 年 9 月）
1997 年 10 月	茨城大学人文学部人文学科助教授（～2003 年 3 月）
2003 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授
2007 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授（～現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

国語学

b 研究課題

日本語音韻史・日本漢字音史・日本韻学史を、主な専門領域とする。古代日本における外国語研究の二本の柱、すなわち漢字音韻学（中国語学）・悉曇学（梵語学）の学史的な研究を、主要な研究領域とする。先人の残したさまざまな記録を元に、江戸時代以前の日本における、音声観察・音声分類の発達および変遷を解明することを目指す。これらの研究成果と連動させつつ、漢字音の日本化の問題、拗音分布の偏在性についての歴史的解釈、濁音の起源（連濁現象の起源）についての考察など、音韻史分野にも研究対象を拡張し、着実に成果を上げている。近年の課題としては、国語音・漢字音（呉音系字音、漢音系字音、唐音系字音）・梵語音を総合する、日本語音節バリエーションの歴史を明らかにすることを目指している。

c 概要と自己評価

論文「山県大弐の悉曇学と国語音声観察」においては、日本語学の立場からの研究が存在しなかった『華曇文字攷』の発掘・分析を行った。『国書総目録』等にも掲載されないため、複写のみによって知られていた同書の写本が、山梨県立博物館甲州文庫に蔵されることを見だし、原本調査を行った。同書は、唐音を利用した悉曇学書の一つで、伝承の過程で日本化した梵字の発音を、当時の中国語音を利用することにより、復元しようとした著作であり、梵字 pa・ca・ha 等の読みの修正に成功している。特に、日本語の語頭のガ行音と語中のガ行音（鼻音）を区別して説明したものとしては、最も早いものであり、貴重である。論文「ハ行子音の歴史—多様性の淵源—」では、清音の濁音化と、促音挿入の平行性についても論じたが、ハ行音に関しては、清音が語頭・語中ともにとめどなく緩んでいったのに対し、濁音化した場合（濁音）・促音挿入した場合（半濁音）には、現代に至るまで閉鎖（強い音形）が維持されていることから考えて、これらが、いずれも強調（語の強調・語構成の強調）に由来するという捉え方が有効であることを提案した。この見通しは、かねてからの主張である、いわゆる連濁が、語構成明示のための内部境界の強調（延長）を起源とするという見解と、軌を一にするものである。

文献資料の調査と理論的な考察の双方を、バランスよく進めてゆくことを目指す方針が、今期も成功したと考える。一通りの問題についての私見の提出を終えたので、早急に成果を単行本にまとめることが必要である。今後、データ収集の焦点は、院政期から鎌倉時代・南北朝時代へと移行してゆくことになる。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、肥爪周二、『日本語概説』、放送大学学術振興会、2015.3
- 共編、肥爪周二、『古語大鑑』第二巻、東京大学出版会、2016.2

(2) 論文

- 肥爪周二、「拗音をめぐる二つの物語」、『日本語の研究』、10-2、2014.4
- 肥爪周二、「山県大弐の悉曇学と国語音声観察」、『近代語研究』、18、2015.2
- 肥爪周二、「ハ行子音の歴史—多様性の淵源—」、『日本語学』、2015.8
- 肥爪周二、「橋本進吉」、『日本語学』、2016.3

(3) 書評

- 沼本克明、『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る一附・半濁点の源流一』、『日本語の研究』、10-3、2014.7

小倉肇、『続・日本呉音の研究—研究篇・資料篇・索引篇・外編』、『国語と国文学』、2015.8

(4) 学会発表

国内、肥爪周二、「山県大弐の悉曇学と国語音声観察」、近代語学会、2014.6.21

国際、肥爪周二、「日本語音韻の諸問題——史的研究からの解明」、国際東方学会会議、2015.5.15

国際、肥爪周二、「日本漢字音史から見た法華経」、国際日本学シンポジウム、2015.7.5

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本女子大学、「国語学講義」、2014.4～2016.3

非常勤講師、國學院大學、「日本語音韻史」、2014.4～2016.3

非常勤講師、名古屋大学、「日本語音節構造史研究」、2014.7

非常勤講師、大阪大学、「日本語音節構造史研究」、2014.12

(2) 学会

国内、訓点語学会、運営委員、2014.4～2016.3

国内、日本語学会、常任査読委員、2015.6～2016.3